（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　東條哲郎

本論文は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての時期のマレー半島ペラにおける華人錫鉱業の展開に関する実証的な社会経済史的研究の論文である。この論文は、この時期のペラにおける華人錫鉱業の展開を、三つの段階に区分して論じている。第一は、1860 年代以降発達し、1880 年代に最盛期を迎える、北西沿海部のラルットを中心とした錫採掘の発展で、そこでは華人有力者による長期的かつ大規模な採掘が行なわれ、秘密結社のネットワークによってリクルートされた労働者が公司によって管理・保護されていた。第二は、1880 年代半ば以降の「錫ラッシュ」で国際的な錫価格が上昇し、あわせて錫の輸送・加工技術が発展することにより、内陸部のキンタでの採掘が活発化する 1900 年前後までの時期で、ここでは多くの中小の華人経営者が進出して、短期的かつ小規模な採掘を展開し、不況時には解雇と失業が、好況期には労働者不足が深刻化する、新しい労働者をめぐる環境が形成された。第三は、1900 年代後半以降の時期で、キンタで浅層の鉱床が枯渇し、華人移民労働者も不足する中で、深層の鉱床を採掘できる機械を導入して採掘を行う、有力華人による大規模な経営が台頭した。本論文は、こうしたペラにおける華人錫採掘の展開を、採掘リースに関する様々な情報を記載した鉱業台帳など、膨大な一次資料を駆使して、労働力、経営者、採掘用地という三つの点から緻密に解明しており、ペラにおける華人錫鉱業経営の実証的研究として、従来の研究水準を超える、多くの新しい知見をもたらした研究として評価できる。

ただし、審査では本論文の弱点も指摘された。特に、リースの変遷は描かれているが、なぜリースの転売が起こるのか、それはレント・シーキングと見なしてよいものなのかが議論されていない、華人小経営の台頭は明瞭に描かれているが、それを可能にした初期資本に関する分析が弱いなど、本論文が多くの興味深い事例を描きながら、なぜそのような事態が生まれたのかの分析が弱いということに、審査委員の指摘が集中した。また、械闘の華人史研究という広がりの中での分析や、マレー半島が世界経済の中に入っていく中でのシンガポールの位置づけ、労働市場や移民労働のあり方としての他地域や他のケースとの比較など、より広い視野、グローバルな広がりをもつ社会経済史的文脈からの考察がほしかったという指摘もなされた。

しかしながら、審査委員会は、こうした弱点はあるものの、本論文が 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのペラにおける華人鉱業研究に新紀元を開いた実証研究であることを確認し、全員一致で博士（文学）の授与にふさわしいものであると判定した。